

全国につながる 連携の輪

北 区



北区では味わえない大自然に囲まれた山形県酒田市で農業体験

歴史がつなぐ3都市との友好交流

北区が山形県酒田市・群馬県甘楽町・群馬県中之条町の3都市と友好都市交流協定を締結して、2017（平成29）年度で20周年を迎えます。きっかけは3都市それぞれ異なりますが、共通するのは区と市・町が協定を締結する以前から住民同士の交流など古い歴史が土台となっていることです。北区は3都市と協力して、これまでの関係をさらに発展させていくと意気込んでいます。

20周年でさらなる発展を目指す

学生寮の建設がきっかけに

昨年12月4日、山形県酒田市と北区との交流イベント「ふれあい酒田DAY」が北とびあで開催されました。イベントでは芋煮100食が無料提供され、多くの区民が長い行列をつくりました。首長にじゃんけんです勝つと酒田の特産物がもらえる恒例のじゃんけん大会も行われ、会場は大いに盛り上がりました。

「ふれあい酒田」は、1998（平成10）年11月に設立された酒田市のゆかりのある人の首都圏ふるさと会。毎年12月に北とびあで「ふれあい酒田DAY」を開催し、総会・懇親会を開いています。区が直接共催・後援しているわけではありませんが、区長や区の幹部が出席している

ほか、ステージ出演者の調整など事務局の相談にも応じています。

酒田市との交流のきっかけは、戦前にまでさかのぼります。1925（大正14）年、北区中里に酒田市中心とした庄内地方出身者のための学生寮（庄内館）が建設されたことを契機として、酒田市出身の人たちとの交流が始まりました。

1992（平成4）年に酒田市の「ふるさと北区区民まつり」に参加したことで交流がさらに活発になり、その後も、交流が続いています。小5社会教科書で庄内平野の米づくりが紹介され、全国から酒田市農政課に農業に関する問い合わせが多数あったことから、市が田植えと稲刈りに首都圏の小学生を招待する事業を開始し、1993（平成5）年

から3年間、北区の子どもたちが参加。1995（平成7）年には北区が酒田市の小学生を招待しました。翌年以降も、青少年地区委員会に委託して、お互いに小学生を受け入れる交流が2015（平成27）年度まで続けられてきました。

区と町が共同出資した施設

群馬県甘楽町に「甘楽ふるさと館」という宿泊施設と体験実習棟からなる複合施設があります。隣接したせらぎでは、マスのつかみ取りができ、自らさばいて、炭焼きにします。マスが焼き上がるまでは館内のお風呂でリラククス。さらに牛肉や豚肉



花川区長にジャンケンで勝つと酒田の特産品がもらえる。ふれあい酒田DAYで



北区と甘楽町が共同出資して建設された甘楽ふるさと館には多くの観光客が訪れます

でバーベキューも楽しめます。そば打ちやコンニャクづくり体験、リング狩りにサツマイモ掘りも。日帰りはもちろん、宿泊も可能です。甘楽ふるさと館は、北区と甘楽町が共同出資により総工費3億円をかけて1988（昭和63）年4月に建設。交流事業の拠点施設として、様々な農村の生活体験やふれあいの場と

して利用されており、北区と甘楽町を結ぶコミュニケーション施設として重要な役割を果たしています。

最近では、2014（平成26）年に近隣の富岡製糸場と絹産業遺産群が世界遺産に登録され、世界遺産見物の帰りに甘楽ふるさと館に立ち寄る観光客も増えているそうです。利用料金は北区民と甘楽町民なら、1泊2食の宿泊で大人5400円（一般7020円）、日帰り利用で大人324円（一般540円）と割安です。

区の担当者によると、東京の基礎自治体が交流自治体との共同出資で、地方にこうしたレクリエーション施設を建設する事例は珍しいのではないかとのことでした。

北区と甘楽町との交流は、1984（昭和59）年、区民が良好な自然環境の中で、スポーツレクリエーション施設を楽しむ自然休暇村構想を検討していた北区と、特定都市との交流で農業を活性化させたい甘楽町との思惑が一致し、始まりました。1985（昭和60）年には区民自然休暇村試行事業の協定を締結。翌年、自然休暇村事業協定を締

結しました。阪神・淡路大震災が発生した1995（平成7）年10月には災害時相互応援協定を結んでいます。

1995（平成7）年からは、北区の小中学校に設置した生ゴミ処理機から出たコンポストを甘楽町に運び、肥料にし、その肥料でできた野菜や果物を給食の食材に利用したり、区のリサイクル拠点「エコ広場館」で販売しています。

実は甘楽町と北区との関係も戦時中までさかのぼります。

1942（昭和17）年、戦局の悪化に伴い東京を始めとした大都市に連合軍のB29爆撃機による空襲が始まりました。都は「東京都学童疎開本部」を設置し、初等科3年生から6年生までの児童を集団疎開させることを決めました。当時の北区は、王子区と滝野川区に分かれていて、両区ともに疎開先には群馬県が割り当てられました。当時の資料によると、滝野川区が4100人、王子区が9300人でした。王子区が多かったのは、軍関係の施設が多く、空襲の目標にされるためでした。甘楽町にも当時、北区の子どもが疎開しました。

北区との交流が始まった翌年の1985（昭和60）年5月、戦時中に甘楽町小幡に学童疎開していた児童（当時、王子区立第二岩淵国民学校の5・6年生）が訪れ、疎開先だった町内の寺院や民家に宿泊し、住職や友人たちと再会し、旧交をあたためました。

約2千人が学童疎開した町

群馬県中之条町もかつて、北区滝野川地区の小学生約2千人が中之条町の四万温泉を中心に学童疎開をしていた町です。これが縁となり、現在ではこれらの人たちが当時を偲び、中之条町を同窓会や家族旅行な



中之条町の「親子ふるさと体験事業」は関係する職員が総出で歓迎してくれます

どで訪れています。1986（昭和61）年、北区長を始め当時の疎開児童250人が中之条町の合併30周年記念事業（第一のふるさとでの集い）に招待されたことが、交流のきっかけとなり、1988（昭和63）年から児童交流事業が始まりました。「親子ふるさと体験事業」は、中之条町が1995（平成7）年から独自に実施していた山村地域都市交流事業「農業体験ツアー」に北区が参加者を公募する形で、1999（平成11）年から始まりました。毎年夏に北区在住の親子約50人が中之条町での2日間にわたる自然、農業、暮らしに触れ、ふるさとを感じる体験活動に参加しています。人気の高い事業で、例年、定員に対して4〜5倍の倍率の応募があるそうです。町側は関係する職員が総出で北区からのツアー客を歓迎し、対応してくれます。区の担当者は「地方都市との交流は、都会では味わえないことを地方で体験できることがメリット。地方の交流都市にとってもPRにつながる。中之条町の職員の方も気さくで、参加した区民の方を暖かく迎えてくれます」と話します。

新たに1都市と協定締結目指す

北区が酒田市、甘楽町、中之条町の3都市と友好都市交流協定を締結したのは、1997（平成9）年。友好都市としての交流は20年ですが、どの都市も協定締結のはるか昔から地域の住民同士がつながり、友情を深めてきました。現在、20周年に向けて3都市の魅力伝えるPR動画を作成しています。

北区では「北期中期計画（平成29年度〜31年度）」で2019（平成31）年度末までに新たに1都市との協定締結を目指しています。

また、北区も他区と同様、他自治体との連携の在り方を模索しています。2016（平成28）年度には新規事業として交流の在り方を検討するための研究会を設置しました。今後、この研究会での検討結果も踏まえ、歴史がふないだ三つの友好都市との「きずな」をさらに確かなものにしていくとともに、新たな都市との連携・交流を視野に、東京を含む全国各地域がともに発展・成長し、共存共栄を図ることができるよう取り組みでいく考えです。